

バト汗西へ行く

V・ヤン 樹下 節 訳

《征服者・2》

平 凡 社

へ行く

V・ヤン 樹下 節 訳

《征服者・2》

ЗАВОЙ
БАТВАТЕЛИ

平 凡 社

征服者（2）

バト汗西へ行く

昭和41年4月18日 初版発行

訳 者 樹 下 節

発行者 下 中 邦 彦

発行者 株式会社 平 凡 社

東京都千代田区四番町 4

振 替 東 京 2 9 6 3 9

印刷 中央精版印刷株式会社

製本 株式会社 石津製本所

訳者との協定
によって検印
を省略します

定価 450 円

目次

第一部 ジンギス汗の遺言

- 一 東方の史家の宿
- 二 暗夜の客
- 三 あわれ、馬を失いし者
- 四 武士道
- 五 遠征に備えるモンゴル軍
- 六 無敵の指揮者
- 七 イマームら途方にくれる
- 八 クルク汗のへら
- 九 勇敢なナザル・キャリゼク
- 一〇 汗の気前のよさ
- 一一 馬の足あと
- 一二 白い馬
- 一三 牧人兄弟

一四 じゃじゃ馬ならし

一五 公正な裁判官

一六 女の知恵

一七 ユルドゥズ

一八 托鉢僧を残らず集めよ

一九 征服者の夢

二〇 ジェハン・ギル——天下の征服者

二一 総指揮官の選出

第二部 バト汗の西征

一 進 発

二 途上にて

三 遅れるは死にひとし

四 砂漠に一人

五 『民族の門』

六 バト汗の七つの星

七 七番目の星

八 ジェハン・ギルとの対話

91 88 85 82 80 76 73 70 70 64 61 57 54 52 50 46 42

九 ジングス汗家の大会議

一〇 イチル川畔にて

一一 バビラ老人

一二 イチル川を渡る

一三 真紅の彗星

一四 ウラク山の妖術者

一五 モンゴル軍の祭日

一六 無気味な夜

一七 イチル汗の物語

第三部 モンゴル軍、ルーシへ侵入

一 森の長老

二 『ミール』からの来訪者

三 最初の警報

四 ジーコエ・ポーレへの進発

五 民衆の混乱

六 リヤサンの民会

七 タタールの使者

ハ ジーコエ・ポーレにて

九 タタール軍、カルミウス街道を経て進出

一〇 タタールの先遣部隊

二 ルーシの捕虜第一号

第四部 モンゴル軍とのせり合い始まる

一 ルーシの使節団

二 ウオローネジ河畔のタタールの陣営

三 モンゴルとの穏やかな出会い

四 本営の上にすさぶ吹雪

五 モンゴル軍、進発す

六 エフブラクセユシカ妃

七 モンコルの捕虜

八 ジーコエ・ポーレの合戦

九 リヤザン攻撃

一〇 死の広野

第五部 リヤサン燃上

いざ斧をとれ

二 リヤザンの城壁の上で

三 進み来るタートル軍

四 リヤサンの包囲

五 あの犬の鳴き声は

六 城外にて

七 『畜生でも見捨てはせぬ』

八 不安な夜

九 どちらの神が強いのか

一〇 リヤサン最後の日

一一 戦死者との別れ

第六部 ルーシをおおう黒雲

一 ぎしぎしと鳴る、あの音は

二 一物たりとも漏らさぬ公の手

三 タートル軍近し

四 祖国の防衛に馳せ参ぜよ

五 目ざすはムシカフ

六 モスクワを望むバト汗

セ コロムナ城下のキュルカン汗

ハ 巻狩り

九 バト汗の怒り

一〇 蛮族、都に迫る

二 ギリシア・ルーシ学院

三 ウラジーミル受難の日

三 火 刑

第七部 『猛将エフパチー』

一 リヤサンの血筋

二 森の空地

三 『アマン』

四 『これ、お前』

五 バト汗を追って

六 夜 戦

七 ペレンデイの沼

八 丘の上の残兵

第八部 吹雪起こる

一	ロストフ公ワシリコ
二	陣 営
三	修道院のバト汗
四	独房の扉のもと
五	『急げ』
六	修道院の庭で
七	バト汗の夢
八	バトの道
九	密林にて
一〇	『白いムリー、助けたまえ』
一一	ンチの沼地
一二	シチにすさぶ嵐
一三	凶 報
一四	戦 闘
一五	宿命の日
一六	戦闘のあと
一七	イグナチの十字架

- 六 抵抗の火を消せ
元 ふたたび草原へ
二 裏切りの値
三 『ルーシの建て直し』
三 遠い故郷で

421 418 415 412 409

今は亡きわが妻マリーア・ヤンの
霊に、われらの協力によって
成った、この新刊の書を捧げる。

V・ヤン

『読者よ。この物語においては、「私心を滅した人間の勇氣と惡逆無道な行爲、自由を目さす必死の戦いと残酷な暴圧、卑しむへき裏切りと固い友愛か語られ、さらにまた、何十万という騎馬兵によって、波頭の木くずのごとく運はれきたり、とうとうと流れるイチル川の岸辺に打ち上げられ、ここに強力な金帳汗国を築いた、まなこ細く、色浅黒い指揮者バト汗の率いる、鉄石のとき部隊の通過にあたって、かれらに征服された国々の住民か、いかにはげしい苦しみにあえいたか」か、物語られるてあろう。……』

（『ハッ・ラヒムの手記』から）

第一部 ジンギス汗の遺言

苦しみ、火と同じように煙を立てるとしたならば、世界は、あまねくその煙に包まれてしまうであろう。

(バルフのシャヒド、九世紀)

一 東方の史家の宿

浅黒いかさかさの手に握られた芦の筆か、細長い紙片のうえをなめらかにすへて行つた。やかてフアキーフ(多識の士)は、アラビアの筆写体で書かれたそれらの文字を、声に出して読みはしめた。ひっそりとした小屋のなかは、フアキーフの単調な声に和して、莞の屋根のうえに小止みもなく降りそそぐ市の音のほか、なにも聞こえなかった。

「……私は、モンギス汗の遺言のことを知りたいと思ひ、事情に通じた人ひとのひとりひとりについて、そのことを確かめることにした。か、そうこうするうちに、私は災いに見舞われるところとなつた。ホハラにおいて、イマーム(回教の僧侶、式僧などと訳す)らに捕えられてしまったのである。

アッラーを敬わぬ破戒者であるとの汚名をきせられ、私

は見るもいとわしい狭い鉄の檻のなかへ閉じ込められてしまった。鬣狗のように四つん這いになつたまま、私は背を伸はすことさえできなかつた。着物は腐つて、ほろほろになり、端と端とを、結んでおくほかはなかつた。一日に一回、牢番か私の木の皿に濁つた水を注ぎにきたか、それさえ忘れてしまふことか多かつた。ときときかれらは、枷をかけられた奴隷をつれてきた。奴隷は悪態をつきながら、檻の床にこひりついたよごれを、鉤竿でこそぎおとした。ほかの囚人の身内の者もやつてきたか、私を見やるかれらの目からは、恐怖の色かりかかわれた。私は「尊いイマームらにのろわれ、現世ではもちろん、あの世までも終身刑を言ひわたされた者であり、死後には必ず火炎地獄におちるべき者」だつたからである……」

フアキーフは、燃え尽きかけている燈明の芯を切り、さらに先を読みつづけた。

『ある日、私は、キプチャクらのさけすむ拜火教徒であり、流浪民であるリュリー族の娘か、人ひとの嘲りや呪咀にたしろう様子もなく、檻のかたわらに立っているのに気がついた。娘は、一つかみの干しふとうと堅果を、私の檻に差し入れて、そのまま走り去つた。翌日女は、地面にとどく長いまっ黒な肩掛けにくるまり、ふたたび姿を現わした。乙女は、牢獄の壁のかたわらを音もなくすへりぬけ、私の

ところへひと切れの香瓜（カボチャ）と餅（もち）とを持ってきた。つぎにかの女は、銀の指輪をはめた浅黒い指を檻の棒にかけ、漆黒の目を私にそそぎながら、ささやくように言った。

「私のためにお祈り下さいませ」

私は、女か私を愚弄しているものと思い、顔をそむけてしまった。か乙女は、翌日またもや檻のかたわらに立ち、執拗（しやう）にくりかえした。

「私の大事な武士か戻ってきますよう、私のためお祈り下さいませ」

「私には祈れない。また、祈ったとてなににならう。そんな、私かイマームらに呪咀（さく）された者であることを、ご存しないのか」

「イマームらは、忌まわしいエフリス（コーランに出てくるア）（ラヒア神話の中の悪霊）にも劣ります。イマームらは、腹黒で傲慢（ごうまん）です。イマームらかあなたを憎んだのは、あなたか正しい方だったからでございませ。私のため、それから遠くにいる人のため、どうかアノラーのご慈悲をお願い下さい」

私は、女の願いを聞き入れた。娘は、そのあと何回かやってきた。かの女を慰めるために私は、夜ごと九の九倍（ここのへ）の幸せをもたらず祈りをささげていることを伝えた。

ベント・ザンキンヤーと呼ばれるその娘は、ある日、笑みを忘れた若者といっしょにやってきた。若者は、黒い巻

き毛を肩までたらし、銀色の太刀を帯ひ、踵（かかと）のとがった黄色い長靴（ながぐつ）をはいていた。かれは、一言も口をきかずに私を見つめていたか、やかて乙女に向かつて言った。

「まさにあの人だ……。清廉潔白なあの人だ……。私が必ず救い出してみせるぞ」

ひたすらに、私たちは顔を見合わせていた。だか私たちは、兄弟の名のりをあげることを恐れた。ほかでもない、私たちを見はっている獄卒の面前で、わか身を滅ぼす愚をおかしたくなかったからである……。長身の若者こそは、ずっとまえに見失い、二度とふたたび会うこともあるまいと思っていた、弟のトゥカンだったのである……。

乙女のほうを眺めやり、かの女と語っているようなふりをしながら、トゥガンは言った。

「イマームにうとまれたもうた正しいお方よ。私の言うことをよく聞かれ、これから私の申し上げるとおりになさいませ。私は、丸薬を三粒持っております。それをお飲みになるのです。するとあなたは、いつかここを飛び去って、山を越え、冷たい流れと香り高い花の谷へ向かわれましょ。そこには、雪のように白い馬か遊び、金色の鳥か人の声で歌っております。また、十六歳のときに恋された乙女か、あなたをお待ちしております」

私は、若者をさえぎって言った。

「そして、目さめてのち、無念やるかたなく、檻の鉄格子でもかめというのか。そのような夢など、ごめんこうむるう……」

「まずはおとなしく、先をお聞きなされませ。あなたか白馬の谷で白昼夢にふけておられる間に、私は獄卒らに、あなたか死んでしまわれたと、こう申します。宗規に従って、あなたの体はただちに葬られることになり、奴隸の鍛冶屋^{じや}か来て、あなたのお体に鉤^{かぎ}をかけ、処刑者の穴へ引きずって行くに違いございません。そのさい、とんなに痛くても、位^{くらい}いたり、わめいたりなさらぬことです。さもなくば、獄卒らか、鉄棒で、あなたの頭を打ち砕きましよう……。ほかの死体といっしょに穴のなかに倒れていられる間に、ま夜中になり、大や胡狼^{オウロウ}かあなたの足をかじりに這い寄ってくるころあいはかり、私と三人の兵とて、あなたを外套^{がいたう}で包み、私たちの遊牧地まで運び、それから太鼓や銅^{どう}をたたき、歌をうたつて、あなたを忘却の谷から呼び戻して進せましよう。誓って申しますか、あなたは必ず息を吹き返されます。そのあとは、馬にまたかつて遠いほかの国へ行かれ、新しい生活をおはしめにならうととうなさるうと、ご勝手にございます……」

ファキーフは、このとき突然きつとなつて、聞き耳をたてた。小屋の薄壁の向こうで、物音がしたように思われた

からである。かれはそのまましばらく、凍りついたようにじっとしていたが、やかつてふたたひ筆を走らせはじめた。『笑みを忘れた若者の言つたとおりのことか起こつた。大胆な救い手のおかげで、疲労困憊^{けんぱい}の極に達しなからも、私は思いがけず、生きてふたたび自由の身となることができた。私は、砂漠^{さばく}に住む拝火教徒のもとに数日滞在したあと、シグナク^{シグナク}の町に向かい、ここて第二の人生をはじめるにいたつたのである……』

(1) バルフのノヤヒド——タシクの詩人。アラビア語とタシク語で書いた。九三六年没(訃告)。

(2) ジンギス汗(一一五五?—一二二七年)——モンゴルの指揮者、アンアの大征服者、朝鮮から黒海にいたる大帝国の創始者。シェベとスベテイ・バートル(この小説のなかにも出てくる)に率いられた、ジンギス汗軍の先遣部隊は、ドニエプル川の川岸まで進み、ここでルーノおよびゼロウエノの軍隊と遭遇した。モンゴル軍は、アノフ海のそばまで退いた。あたりを流れるカルカ川付近で戦闘は開始され(一二二四年、ルーノとゼロウエノの部隊は、殲滅のうきめを見た。シェベとスベテイ・バートルによって行なわれたこの攻撃作戦は、ヨーロッパ全土を征服するため、西方への遠征を企図したジンギス汗の命令による、予備的偵察であった。ジンギス汗の計画の一部は、後年、かれの孫バトが部隊を引きつれてアドリア海岸に達することで、実現された。ジンギス汗の中央アンアへ

の侵入は（二三〇）〜二二五年、この三部作の第一巻「シンキス汗」において語られている。

（3）東洋諸民族の間では、九という数字は、神聖かつ幸福につながる数字とされている。

（4）ノグナク——十三世紀のころノルダリア河畔にあった豊かな商業都市。シュチ・ウルス国の最初の首都。現在そのあとには、荒れはてた丘と穴と、ノグナクのかつての繁栄を物語る追持と、廟の残骸が幾つか残っているだけである。

二 暗夜の客

ファキーフのハン・ラヒムは、ふたたび手を止めて、銅の盆のうえにそとと芦の筆をおき、白くなりかけたひけをしごいた。しとしとと降りそそぐ雨の音にまじって、薄い壁ごしに、かすかなから何かの物音かはつきりと伝わってきた。

「冷たい秋の夜の闇のなかを歩いているのはいったいたれだ。よからぬ考えを抱く悪いやつのはかに、このしめっぽい霧のなかを歩きまわる者などいはいしまい」

古い本の束の上にのせられた粘土の燭台が、すすけたいびつな壁、古ひたしゅうたん、しっと動かぬやつれた学者のうえに、あわい光を投げていた。小さな窓をおおってあ

る、色模様の織物の切れ端がかすかに揺れた。

入り口の傍らに丸くなっていた大きな白大か、耳をそばだてて低くうなりはしめた。ふと浅黒い手か窓の端に現われ、窓掛けのすみをかかげ、闇のなかで黒い斜目かびかりと光った。

「たれだ」

ハン・ラヒムはそう問いたたし、

「アクバイ、すわっている」

と言いなから、はね起きた大の頭を押えた。

「道に迷った者たか、火にあたらせてはもらえまいか。ぬれた着物をかわかしたいのだから」

見知らぬ男は、聞きとれぬような小声で言った。

「物音を恐れているような口ぶりだな……」

とファキーフは思った。

「信用しても大事ないかな」

「本をお持ちのようたか……、そなたハシ・ラヒム師ではないか」

「仰せのとおり、わたしにか」

「ては、すぐに中へ入れてもらいたい。マールランナフルの大ヴィノール（宰相）、マフムード・ヤルワチのあいさつを携えてまいったのだ……」

「たれにも入れぬこのあばら屋の入り口だが、その名を聞